

小児科



小児科部長
大浦 敏博



診療内容と実績

当科は常勤スタッフ9名とレジデント、初期研修医で構成されています。小児科学会専門医は8名、さらに臨床遺伝、救急医学会、小児神経学会、てんかん学会、腎臓学会、小児循環器学会の各専門医を擁し、専門性の高い診療を行っています。また小児科学会、小児神経学会、てんかん学会、救急医学会、腎臓学会の各専門医研修施設として認められています。

一般病棟は36床、NICUは3床で運営され、平成28年の小児科総入院数は1,835名です。疾患別では呼吸器(肺炎、喘息など)が35%と最も多く、以下神経(熱性けいれん、てんかんなど)、消化器(感染性胃腸炎など)、循環器(川崎病など)、腎(尿路感染症やネフローゼ症候群など)と続きます。

救命救急センターにおける小児科受診者数は2985名(病院全体の21%)、入院は1322名(入院率44%)。救急車で受診は1289名(43%)。けいれん性疾患、脳炎・脳症等神経疾患が772名(26%)、肺炎、喘息等呼吸器疾患が710名(24%)、胃腸炎等消化器疾患が277名(9%)でした。

プログラムの目的と特徴

小児医療に関する知識、高度の診療技術を習得することが目標です。仙台市小児救急医療の中核的役割を担っており、救命救急センターでの診療を通してプライマリケアから最重症例まで幅広い領域の小児疾患を数多く経験できることが特徴です。スタッフ、レジデント、研修医が主治医としてチームを組み、2年目が1年目を、3年目が2年目を教える、いわゆる「屋根瓦方式」の指導を実践しています。

研修内容と到達目標

■1年研修・2年研修

- 小児病棟で急性疾患、感染症などのcommon diseaseや各専門領域の診療を行い、採血、静脈路確保、動脈穿刺、輸液管理、超音波検査、導尿、骨髄穿刺、腰椎穿刺、排尿時膀胱尿管造影等の基本的手技を習得する
- 救命救急センターでの研修を通して、小児救急患者の適切なトリアージ・搬送が行え、PALSをベースとする基本的救命・救急処置が出来る様にする
- ICU・小児病棟で重症患者(けいれん重積、呼吸不全、sepsisなど)の診療を行い、気道・呼吸・循環(ABC)に対する初療を実践する
- 重症例に対する挿管、骨髄針、中心静脈穿刺、胸腔穿刺、低体温療法、人工呼吸管理、ショック管理などの手技を経験する
- 帝王切開やハイリスク分娩に立ち会い、新生児蘇生法を習得し、NICUでの研修を通して、低出生体重児の管理、治療を行う
- 英語論文の抄読会、脳波・ABRの判読会、放射線科との合同カンファレンスなどの勉強会を行う

小児科専門医制度について

当院は東北大学医学部小児科を基幹病院とする小児科専門医研修プログラムの中で特定分野研修病院と位置付けられています。当院で小児科後期研修を希望する初期研修医の皆さんは、直接当院小児科の大浦(tohura@med.tohoku.ac.jp)、もしくは東北大学小児科研修協議会の笹原までご連絡ください(URL参照)。平成30年度の専攻医一次登録は10月10日より開始される予定です。

東北大学小児科研修協議会 <http://www.ped.hosp.tohoku.ac.jp/application.html>